マスクだらけの功罪

2019 年 12 月に中国武漢に端を発した新型コロナウイルス感染症は、急激な勢いで感染者数が増加し、世界にも広がっている。国内では指定感染症に指定され、ＷＨＯは緊急事態宣言を出して対策を取っているが、新たな知見や情報が日々更新されている。今後の国内における感染拡大について、感染症の専門家は「現時点では情報が少なすぎて判断できない」としつつも、日本の医療体制を考えれば「すぐ地域に一気に拡大するとは考えにくい」という。

このような状況の中、マスクを巡る国内外の騒ぎは異様であると思う。中国のようにマスクの効用はともあれ、生活するためには何が何でもマスクが必要という状況は異常ではあるが、マスクをつけて安心するあるいはマスクのありなしで行動を規制されるという現実は切ない。

一方日本ではどうだろうか。
突如マスク争奪戦が始まり、情報弱者・買い物弱者が気がついたときにはすでに店頭にはなく、1 枚のマスクを求めて小さな薬局までも回っている人の姿が気の毒である。

2000 年はじめからインフルエンザの流行があり、日本でも 2009 年に新型インフルエンザのパンデミックが起こった。当初の一般生活者の予防対策は「手洗い、うがい、マスク」の 3 点セットであり、幼稚園児が並んでうがいをする姿がしばしば報じられた。その後「うがいの効果」が証明されないとして、厚労省のＨＰから消え、最近では「マスクの効果」も限定的であるとして「マスク着用」も消えた。現在は「咳エチケット」である。もちろんこれには感染者のマスク着用も含まれるし、ケースバイケースではあるが、街中マスクだらけは異常であろう。とくに異様に感じるのはデパートやショッピングセンターなどのサービス業の店員のマスクである。お客がノーマスクなのに迎える側がマスク着用とはどういうことか？　①客がばらまくウイルスなどを吸いたくないよ　②私はインフルエンザに罹っていますよ
①なら客に失礼　②なら店に出ないで休みなさいと言いたい。

特殊なマスクを除けば、マスクの性能からして「ウイルス感染予防」の役には立たないことは明らかなのに、「濃厚接触」という言葉におびえてつけるのだろうか。特別な職業や状況以外では「濃厚接触」は起きないようである。筆者の感覚ではマスクをつけている人は「何らかの不調をもつ人」であると判断する。「不調」には色々あると思うが、周囲への影響が大きいのは感染症で、普通かぜ、インフルエンザなどに罹っている場合でしょう。咳などによる飛沫に含まれるウイルスをばらまかない心遣いと理解している。しかし、昨今どこもかしこもマスクだらけである。

マスクだらけの社会では実際に困った場面もある。口元や顔の表情が分からず聾者の方々が医療機関などでとても困惑するそうだ。また高齢者にとっては相手の言葉が聞き取りにくく、間違った判断をしてしまうこともある。また、花粉症等マスクが欠かせない人も大勢いる。本格的シーズンまでにマスクの供給が間に合えば良いと切に思う。大量のマスクを買い込んだ人の思いはどうであろうか。

戸田　2020.02.17